

Title	18世紀イギリス都市社会分析のための新視点,「公域」と「都市エリート」: キングス・リンを中心に
Sub Title	A New Perspective of Urban Society in Eighteenth-Century Britain : Analysis of the Public Sphere and the Urban Elite in King's Lynn
Author	小西, 恵美(Konishi, Emi)
Publisher	
Publication year	1999
Jtitle	三田商学研究 (Mita business review). Vol.42, No.4 (1999. 10) ,p.93-
JaLC DOI	
Abstract	「公域」と「都市エリート」概念はイングランドの「長い18世紀社会」を理解する上で有効である。本稿では18世紀のキングス・リンの経験を参考に両概念について議論した後,キングス・リンの都市エリートについて実際に検討する。都市化の表舞台にあった長い18世紀におけるイングランドの地方都市は大きな変化を遂げていた。イングランド都市ルネサンス期とも呼ばれるこの時期の特徴として,とりわけボランティア・アソシエーションによる活動や文化的生活の充実ぶりが挙げられる。このような都市の成長にともない公域は変化し,その機能も拡大
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234698-19991000-00686029">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234698-19991000-00686029</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 18世紀イギリス都市社会分析のための新視点, 「公域」と「都市エリート」<sup>1)</sup>

—キングス・リンを中心に—

小西 恵美

## <要 約>

「公域」と「都市エリート」概念はイングランドの「長い18世紀社会」を理解する上で有効である。本稿では18世紀のキングス・リンの経験を参考に両概念について議論した後、キングス・リンの都市エリートについて実際に検討する。

都市化の表舞台にあった長い18世紀におけるイングランドの地方都市は大きな変化を遂げていた。イングランド都市ルネサンス期とも呼ばれるこの時期の特徴として、とりわけボランティア・アソシエーションによる活動や文化的生活の充実ぶりが挙げられる。このような都市の成長にともない公域は変化し、その機能も拡大・分化していった。その中で、公域は、統治とソーシャビリティーの集合的な領域と解釈できるが、キングス・リンの例は18世紀の公域はとりわけ、地方政府、ボランティア・アソシエーション、文化・娯楽イベントを中心とする領域、すなわち政治的・社会的・文化的3つの視点からの検討が重要であることを示す。

都市エリートは公域と関連させた議論が可能である。都市エリートであるためには、まず公域に参加するために必要とされるだけの資産を持っていることが前提条件であった。そして、さらにそれを元手に公域で統治と社交面を中心とする活動を主導しなければならなかった。具体的には、地方政府機関の重要なポストに就き、数多くのボランティア・アソシエーションの責任者として様々な活動にかかわり、文化・娯楽イベントに頻繁に参加することによってそれらの「消費」に貢献することを要求された。都市エリートはエリートとしての社会的認識が必要であったが、このような活動を公域で自己顕示することにより、民衆が都市エリートと認識し、またエリート間のソーシャビリティーはエリート内での認識度を高めた。

キングス・リンの例は、この時期、複数のエリートが政治、社会、文化的領域に代表される公域のいたる部分で重複・補完する活動をしながら集合的に都市エリートを形成していたことを示している。

## <キーワード>

長い18世紀、都市化、ボランティア・アソシエーション、イングランド都市ルネサンス、公域（政治的・社会的・文化的視点）、都市エリート、資産条件、公域での先導的役割、公域での自己顕示、ソーシャビリティー、統治

1) 本稿は1999年1月の Postgraduate Seminar, Institute of Historical Research, University of London と、同年5月の第49回西洋史学会の報告を基にして書かれたものである。報告後に多くの人からの重要な批判やコメントを受けたが、それらは今後の研究の大きな指針となった。この場を借りて感謝の意を表したい。また、とりわけ、Prof. P. J. Corfield と中野忠、工藤教和両教授にお世話になった。記してお礼を申し上げます。

## 1. 序

18世紀イングランドにおける重要な変化の1つに都市化があげられる<sup>2)</sup>。この時期、イングランドは伝統的農業社会から新しい都市社会への移行期であり、特に18世紀後半ともなると都市化の速度が加速した。そのため1750年から1830年代は地方都市の都市化にとっても重要な時期であったと言える。この時期の都市は、前世紀と比べ、大きな変化をとげていた。その中でも特にボランティア・アソシエーションを通しての活動と、文化生活的充実、この時期の大きな特徴と言える。

ビクトリア時代の社会を理解する上で「階級」概念が有効であることに異議を唱える者は多くないであろう。しかし、この概念が18世紀社会を捉える際にも同じように有効なのであるか。たとえば「ミドリング・ソート」概念は、階級社会の確立したビクトリア時代と比較して、無階級社会と言われ、貴族以外は全て平民としてまとめられて考えていた18世紀に対する見方を修正するきっかけとなった。貴族や地主、そして場合によっては一部の大商人から構成されるアッパー・ソートと下層部に位置する貧困層から、その中間に位置するミドリング・ソートを区別し、その役割の重要性に注目するものであるが、これはある意味で階級概念を18世紀社会の研究に適合するよう編成し直したものとも考えられる。バリー (J. Barry) をはじめ、多くの研究者がこの課題に取り組んできており、18世紀社会の切り込み口として重要な位置を占めることは間違いない<sup>3)</sup>。しかし、ミドリング・ソートは、ビクトリア期のミドル・クラスとは異なり、明確なアイデンティティーやグループ意識を持つとは言いがたく、グループとして特定するにはその範囲も広すぎるという欠点が指摘できる。

近年、18・19世紀イギリスの都市エリートはミドリング・ソート研究の一環で議論されることが多いものの、徐々に大きな議論的になりつつある<sup>4)</sup>。また、都市エリート概念は近世イギリス地方都市社会を理解する上で従来の階級概念に代る可能性をも持ち合わせる重要な概念でもある。それにもかかわらず、都市エリートは明確な定義がなされないまま議論される傾向がある。

他方で「パブリック」とそれに対応する「プライベート」はそれぞれ独立した領域として扱われてきた。その議論は政治・社会思想史の分野で長い論争史を持ち、また女性史やジェンダー史の研

2) 2本稿では、特別に言及しない限り、18世紀とは17世紀末の王政復古期以降、1830年代の選挙法改正や都市改革法に代表される都市の改革期を含む長期の18世紀を指すこととする。

3) ミドリング・ソートについては Earle [1989]; Langford [1989]; Barry and Brooks [1994]; Smal [1994]; Wahrman [1995]; Hunt [1996]; 関口、梅津、道重[1999]等を参照。

4) 都市エリートについての先駆的研究は R. G. Wilson [1971]; Jackson [1972]。最近、都市ジェントルマンと関連付けて都市エリートの概念が議論され始めている。Corfield [1996]を参照。またビクトリア期の都市エリートについては Trainor [1985] [1993]と Koditschek [1990]を参照。Trainor は彼の論文と著書の中でビクトリア期の都市エリートの定義を述べているが、それを18世紀エリートに適用できるかどうかについては議論の必要がある。

究の中では、公的な役割を担う男性の領域であるパブリックと、そこから除外され家庭に入る女性の領域であるプライベートが対比され議論された。しかし近年、女性史やジェンダー史の研究の発展にともない、新しい視点からその問題が再び大きく取り扱われるようになった。このため従来と比較して、パブリックに対する解釈も多様で広範な捉え方がなされるようになってきた。<sup>5)</sup>

本稿は18世紀のイギリス都市エリートとパブリックな領域との深いつながりに着目して、都市エリートをパブリック論に関連付けて議論することを目的とする。その際、イングランドの一地方都市、キングス・リンを例にとって考察する。

キングス・リンはイースト・アングリア地方、ノーフォーク州に位置する古くからの港湾都市である。国内のみならず海外、特にバルト諸国との取引関係は深く、14世紀末にその最盛期を迎えた時は、イングランド上位5位以内の取引量を持つほどであった。近世に入り海外との取引量は激減したものの、イースト・アングリア地方における沿岸・河川取引の基点としての重要性は保持し続けられた。本稿の対象時期には、イングランド北部、ニューカッスル周辺の石炭とキングス・リンの後背地の農業地帯で生産された穀物が取引の中心であった。<sup>6)</sup>人口は18世紀半ばに8千から9千人と推測され、1801年には1万人、さらに1830年には1万3千人が確認されている。<sup>7)</sup>キングス・リンは特別な産業を持つわけでもなく、その経済は取引とそれに伴う仕事に依存していた。また後背地も肥沃な農業地帯であり、工業都市や鉱物資源に恵まれず、19世紀に入ってから急成長は望めず、相対的衰退は避けられなかった。しかし、少なくとも鉄道が敷設された19世紀半ばまでは、絶対的衰退は見られず、地域における経済的そして社会的重要性は残り続けた。その点で地方都市エリートの検討にキングス・リンを参考にするのは妥当といえるし、加えて、入手可能な一次史料の種類と量を考慮しても、この町に焦点をあてる価値がある<sup>8)</sup>と考える。

以下では適宜、キングス・リンの例を挙げながら、まずパブリックな領域について吟味した後、その議論に基づき、イギリス18世紀の都市エリートを検討する。また、本稿ではそのようなパブリックな領域を便宜上、仮に「公域」と呼ぶことにする。<sup>9)</sup>

5) パブリックとプライベートについての議論は、例えば Calhoun [1992]; Vickery [1993][1998]; Klein [1995]; Barker & Chalus [1997]; Shoemaker [1998] を参照。

6) Willan [1936][1938], Wood [1992][1998], Barney [1997]。

7) Wrigley と Patten はかなり人口を多く見積もってそれぞれ7千人と9千人という数字を算出した。Muldrew も17世紀末の炉税の調査を基に7千人と8千人の間であったとした。しかし、人頭税と炉税記録を併用した P. Richards と Cooper は多くて6千人という結論を出し、また Chalklin は5千人を超えていたことは確実としている。Corfield と de Vries はイングランドの港湾都市の人口の一般的な傾向から、5千—6千人が妥当とした。Wrigley & Schofield [1981]; Patten [1977]; Muldrew [1990]; Richards [1990]; Cooper [1985]; Chalklin [1974]; Corfield [1984]; de Vries [1984]。

8) 参考文献欄の一次史料を参照のこと。

9) *Public sphere* は「公共性」や「公共領域」と訳されることが多いが、この訳は、特にハーバースの主張する '*public sphere*' に重ね合わせて見られがちである。そのため、それと区別することを目的に、ここでは「公域」と呼ぶことにした。しかし数人からの指摘の通り、新しい言葉を使う際には慎重にならなければならない。また「公域」という言葉がここで主張する *public sphere* の訳語として適当であるかどうかは今後、議論が残る部分でもある。

## 2. 公域 (Public Sphere)

18世紀の「公域」概念は今日のものとは異なり、全ての人々に一様に参加の機会が与えられていたわけではない。近世イングランドでは、公域は裕福な者のみにしか開かれておらず、そうでない人々の都市社会での行事や都市行政機能への参加は制限されていたからである。つまり事実上、資産基準が存在し、都市の公域で力を発揮するためには、ある一定のレベルの財産を持つことを要求された。一方、貧しい者達は公域への直接的な参加はできなかったが、彼らの抱える問題自体は公域で貧困救済等の形で裕福な者達によって解決されていた。故に公域は全住民のためのものとも考えられるが、少なくとも公域への参加は都市人口の一部にしか許されていなかったという点では、閉鎖的空間であったと言える。

公域内には明確な境界はなく、部分部分が相互に関係し、また重なり合いながら機能するものであるため、公域は本来、不可分で、都市社会における集合的な領域として扱われるべきである。しかし、18世紀の社会変化を通して、都市エリートの多様化をも引き起こすような公域の機能の拡大・分化を考慮すると18世紀の公域を理解するにはいくつかの視点からの検討が必要とされる。18世紀までの公域での主な関心事は政治的安定性と秩序のある社会を獲得することであった。そしてその目的のために機能したのは地方政府であり、故に、公域はある意味で政治的領域に限られ、都市エリートとは政治的領域で活動する人々を指すとも言えた。しかしそのような基本的なものを入れた人々は、経済・社会の発展にともない、18世紀には慈善やインフラストラクチャーの整備だけでなく、文化・娯楽など彼らの生活を向上させるような新しいものやサービスを求めるようになっていった。それらの需要は前時代のように政治的領域のみで対応されるわけではなく、公域で必要とされるサービスが分化するにつれ、社会的領域という新しい領域が確立し、またファッショナブルな社会の進行は文化的領域を引き出すことになった。

ここではキングス・リンの公域を政治的、社会的、そして文化的3つの側面から検討する。各領域の詳細は後述するが、政治的領域にはいわゆる地方政府 (local government) とその活動、社会的領域には各種ボランティア・アソシエーションとその活動が含まれる。他方、文化的領域としては文化・娯楽イベントを「消費」する場としての機能を重視する観点から、とりわけ人々の「消費」活動が注目される。これら3つの領域は相補的關係にあり、そしてそれぞれが別個の機能を持ち、一つのヒエラルキーでは片付けられない部分で関係しあっている。本稿では18世紀社会像を把握するための一方法として、政治的、社会的、そして文化的の3つの視点からの公域の検討を試みる。

政治的領域と社会的領域間の差異はしばしば強調されるが、これら2つの領域は広い意味での都市行政を行い、都市の基本構造を構成したという点で、少なくとも類似した機能を持ち合わせる。

表1 キングス・リンの政治的機関

コーポレーション	
法廷	Quarter Session Court Guildhall Court Admiral Court
教区委員会	
法定特別委員会	Guardians of the Poor (1701) Commission for Relieving Maimed Seamen and Widows (1747) Pilot and Anchor Commission (1773) Commission under the Haling Act (1790) Eau Brink Commission (1795) Paving Commission (1803)

19世紀改革期以前のイングランドの地方政府は体系だった機関や組織からは構成されず、地方政府はなかったとも言われるが、政治・社会的両領域ではそれぞれの組織の機能は重なり合いながら、大きな意味での地方政府を構成していたともいえる。

政治的領域を構成する機関は通常、習慣や法によって許可される。キングス・リンではコーポレーションを中心とし、道路舗装委員会 (Paving Commission) や救貧委員会 (Guardians of the Poor) などの法定特別委員会 (statutory commission)、教区委員会 (parish vestry)、そして法廷等がこの領域に分類される〔表1〕。一方、社会的領域は自発的に形成されたアソシエーションから構成される。慈善団体、友愛団体、モラルや社会規範向上のための団体、宗教団体、学校、文化・娯楽ソサエティー、フリーメーソンやオッドフェローのロッジ、ディベート・ソサエティー、職業利益に基づく団体等、様々な種類が存在し、その数も政治的機関に比べ圧倒的に多い。キングス・リンでは1830年代までに100を超えるボランティア・アソシエーションが作られていたことは確かである〔表2〕。

ここで社会的と分類されている領域は、ハバーマス (J. Habermas) の言う「市民的公共性 (Bourgeois Public Sphere)」と非常に似ているように思われる。<sup>10)</sup> ハバーマスは、「市民的公共性」は政治的組織に対抗するもので、既存の権威への反対勢力が高まった結果、公共性を重んじる市民により新しい組織が作られたと解釈した。事実、いくつかのボランティア・アソシエーションがそのような目的で組織されたことは確かであり、とりわけ18世紀に急速に発展した都市部においてボランティア・アソシエーションが地方政府と反目し合う例が見られた。例えばマンチェスターではマナー領主や治安判事を中心に、トーリー・アングリカン軸で都市行政はコントロールされていたが、それに対抗する強力なソサエティーをユニタリアンは形成した。<sup>11)</sup> この例が示すように、地方政府に対

10) Habermas [1989]。

11) Gatrell [1982]。

表2 キングス・リンのボランティアソシエーション, 1750-1830年代

## 1. 慈善団体・友愛組合

慈善団体**St James Hospital** 1609**St Mary Magdalene Hospital** 1611**St James Workhouse** 1687**Framingham Hospital** 1714*Society for Maimed and Disabled Seamen. (Muster Roll Society)* 1749*Child Bed Linen Society* 1791*Soup Charity Society* c. 1800*The Benevolent Society* 1804**Lynn Dispensary** 1812*Society for the Widows and Orphans of the Sailors* 1821*Society for Visiting and Relieving the Sick, Poor at their own Houses* 1826*United Association of Free Burgess* 1827**Benevolent Asylum** (Methodist Almshouse) 1829*Hibernian Society***West Norfolk and Lynn Hospital** 1834友愛組合*Society for Receiving Relief in Sickness, Lying-in, Old Age, and upon the Death of their Husbands* 1795*Beneficial Society for Poor Women* 1799*Lynn Sub-Division of Fakenham Provident Society* bef.1807*Benevolent Viduarian Society* 1807*Strangersi Friend Society* 1809*Lynn Select Provident Society for the Benefit of Widows**Society for Relieving Ship Wrecked Seamen**Sailor's Friendly Society**Self-Supporting Institution for the Benefit of Sick and Hurt* 1834*Seamen for a benefit society**a few of the Benefit Clubs*

## 2. モラル・マナー向上のための教育的団体

宗教関連団体*Wesleyan Society**Independents Society**Baptist Society**Unitarian Society**Society of Friend (Quaker)**(Catholic Society)**(Jewish Society)**Church Missionary Society**Missionary Association of Ladies**Methodist Missionary Society**Independents Missionary Society**Baptist Missionary Society**Bible Society (Lynn Branch of Norfolk and Norwich Auxiliary)* 1813*Bible Society (Marshland Branch)* 1825*Society for Promoting Christian Knowledge**Society of the Propagation of the Gospel**Bethel Union Society**General Tract Society*学校**Grammar School** 1534**Writing School** 1630**Lancastrian (Free) School for Boys** 1808**Lancastrian School for Girls** 1792**National Schools** 1843*Lynn National School Society* 1833**Wesleyan Sunday School** 1797**Independent Sunday School** 1812**Baptist Sunday School** 1830**Primitive methodist Sunday School** 1826*Sunday School Society**private Schools and Academies*禁酒団体*Lynn Temperance Society (Lynn Auxiliary to the British and Foreign Magistrate)* 1834

## 3. 文化・娯楽団体

文化団体・施設**St. George's Hall** C 15**St. Margaret Church Library** 1631**Assembly Room** 1769**Subscription Library** 1797

some circulating libraries

**Subscription Theatre** 1813**Lynn Mechanics, Scientific and Literary Institution** 1827*Literary Society* 1827*Ladies' Book Club**Some Institutions/ Clubs of Theatrical Amusement**Music Society* around 1830**Saturday Market House** 1830*Lynn Horticultural Society* 1831*Lynn Conversation and Society of Arts* 1842**Lynn Museum** 1844*Ecclesiological Society* 1844新聞*Lynn and Wisbech Packet* 1800-02*Lynn Advertiser and West Norfolk Herald* 1841-スポーツクラブ・娯楽団体*Lynn Cricket Club**Ouze Club (boat)* 1828*(a few boat clubs)**a new Lynn Cricket Club* 1833

*Norfolk Subscription Fox Hounds Club*

義勇団

*Lynn Loyal Volunteer* 1794

*Freebridge Lynn Yeomanry Cavalry*

*All Saint South Lynn Company of Volunteer Infantry*

#### 4. その他の団体

フリーメーソン・オドフェロー・ジェントルマンクラブ

(a few **Freemason' Lodges/ Taverns**)

*Society of Odd-fellows*

*Society of True Briton*

その他

*Subscribers of the Association for Apprehending and Convicting Horse Stealers* bef.1778

*Lynn Association for Prosecuting Felons* 1792

*West Norfolk Agricultural Society* 1800

*Mill Society* 1801

*Subscribers of the Lynn and Hunstanton Life Boat* bef.1831

*Subscribers of the Lynn Ferry*

*Society of Shipmaster*

*Society of Tanners, Carriers, Shoe Manufacturers and Saddler of Lynn*

政治思想関係

*The Independent Free Burgess Society* around 1808

*Legal Debate Society* 1829

*Anti-Slavery Society* 1833

<出典>

新聞や書籍, パンフレット, 日記, 手紙等, 当時書かれた文献から情報を収集。

<注>

・太字は建築物。

・設立年度はわかるもののみ記入。

・存在は確認されたものの, 団体名・呼称がわからないものも含む。

・**Jewish Community** と **Catholic Community** がマイナーグループとしてキングス・リンにあり独自の活動をしていた記録はあるが, それらが **Society** を形成し, 活動していたかどうかは確認できない。

・このリストは各アソシエーションの主な活動目的に沿って分類したものである。ただし, 中にはいくつかの機能を持ち合わせたり, 設立当初と性質が変化していったものもあり, 分類は不完全なものである。しかし, 各ボランティアアソシエーションを詳しく検討することが本稿の目的ではないので, ここでは便宜的にこの不完全な分類を使っている。

抗するアソシエーションは宗教的または政治的軋轢から形成されることが多かった。<sup>12)</sup>

しかし, ハバーマスは, ボランティア・アソシエーションを都市政府への対抗機関としてとらえすぎる傾向がある。それがボランティア・アソシエーションの持つ機能の1つであったことは疑いないが, アソシエーションの多くは必ずしも地方政府に対抗するものではなかった。<sup>13)</sup> また中には協力体制をとり, あたかも地方政府の下部組織のように機能するものさえあった。逆に都市政府が特に財政面でボランティア・アソシエーションを援助するケースも見られた。キングス・リンでしばしば観察されるアソシエーションはこの種のものであり, 例えば1812年に建築された新劇場に関し、総費用 5225 ポンドは寄付によって賄われたが, 最大の寄付者は 1000 ポンドを負担した都市コーポレーションであった。<sup>14)</sup>

政治的領域と社会的領域が都市社会の構造が形成される場だとすると, 文化的領域はその構造をどう利用するかという角度から分析され得る。文化的領域はイベントによって形成されるが, それらのイベントは政治・社会的領域に属する組織によって企画されたり, またそれらの領域の施設で行

12) Roger [1989]; Wilson [1995]。

13) K. Wilson は既存のエリートと急進派のような異なる社会グループのポリティカルカルチャー間におけるボランティアホスピタルの仲介者的な役割に注目した。Wilson [1990]。

14) KL/C 8/41。

われるものであった。その意味で、文化的領域は政治・社会的領域と深い関わりを持つと言えよう。都市の文化的な生活は、18世紀のカントリー・ジェントリの都市への流入によって助長されたことに疑いはない<sup>15)</sup>。しかしそれは徐々に都市独自のスタイルを築き上げていき、その結果、少なくとも18世紀半ばまでに都市の「ハイカルチャー」は、カントリー・ジェントリの文化とも、また伝統的民衆文化とも異なるものになった。すなわち、都市の文化的領域はあくまでも都市独特のものであり、地方エリートの文化の模倣でもなかったし、洗練度の低い民衆文化とも異なっていた。事実、デフォー (D. Defoe) は、多くのカントリー・ジェントリが都市の文化生活を享受するためにキングス・リンを訪問していたことを伝えている<sup>16)</sup>。また、文化的領域はボーゼイ (P. Borsay) らが主張する「イギリス都市ルネサンス (English Urban Renaissance)」の影響が最も顕著にあらわれた分野であり、集い (assembly) やコンサート、演劇、展示会、スポーツ大会などの文化・娯楽イベントは都市ルネサンスを代表するものとも言える。キングス・リンでもこの種のイベントはしばしば催されており、地方新聞にはこれらの広告や詳細な報告が掲載されていた。

以上では公域を3側面から検討した。しかし、全ての歴史家がこれら3つの側面を公域と考えることに同意もしないし、またその他の側面を指摘するかもしれない。政治的領域を公域としてみなすのは伝統的視点である<sup>17)</sup>。また社会的領域はモリス (R. J. Morris) やハバーマスをはじめとするボランタリー・アソシエーションの擬似行政機能に注意を払った歴史家によって明らかにされ、近年ではこの領域の公域としての取扱いがむしろ主流にさえなっている<sup>18)</sup>。それに対して、文化的領域を公域の一部とみなすのは比較的新しい考え方である。そのためこの概念にはより多くの議論があり、さらなる研究が必要とされる<sup>19)</sup>。しかし都市ルネサンスがこの時代の1つの大きな特徴であるとすれば、文化的領域の考察を避けて18世紀社会を理解することはできない。

以上の3側面の他にも、考え得るいくつかの領域がある。例えば経済的側面が社会分析において重要な部分を占めることに多くの人が賛成するであろう。事実、過去の研究の中で最も力が入られた分野の1つであるし、近年さかんに議論されているジェントルマン資本主義論も経済的側面がキーになっている<sup>20)</sup>。しかしこの領域を公域と扱うべきかは議論の余地があり、事実、ハバーマスのように経済的側面を「公共性」からはずして議論する者も多い<sup>21)</sup>。18世紀の公域に参加するためには

15) McKendrick, Brewer & Plumb [1982]; Borsay [1989]; Langford [1989]。

16) Defoe は1724年のキングス・リンについて、「たくさんの育ちの良い人々が集まる場所である」と記述している。Defoe [1991], p. 31。

17) この見解は S. & B. Webb によって確立された。Webb [1908]。Fraiser [1976] も政治的領域を対象としてとりあげた研究である。

18) 例えば Morris はとりわけボランタリー・アソシエーションの重要性を強調している。Morris [1983] [1990] を参照。

19) Shoemaker は公的な領域 (public sphere) の一部としての文化的な領域に目をつけ、その考え方を分析に取り入れている。Shoemaker [1998]。

20) Rubinstein [1987], Cain & Hopkins [1993]。

21) Habermas [1989]。

ある一定の資産基準を満たす必要があったことは既述した。このことから経済的領域が公域と関係が深いことは明らかであるが、本稿では、むしろ経済的領域の公域への参加の前提条件を満たすための場としての機能に重点を置き、あえて独立した扱いはしない。また、18世紀後半になると社会変化に伴い、女性領域も公域の中で徐々に確立しつつあった。しかし、前述の3領域と比較してその規模はかなり小さく、文化的領域や一部の社会的領域の中で議論することも可能である。

多様化する社会の追究にとって、公域の範囲をできるだけ広く規定することは重要であるが、とりわけ政治的・社会的・文化的の3側面の検討は不可欠である。したがって、本稿では3側面からのアプローチを試みた。

一般的に、社会の変化や発展に伴い、人々は社会に従来とは異なるものを求める。社会の発展やコミュニティの拡張はより大きい需要を引き起こし、これらのニーズを実現する新しい方法も出現したが、このことは公域が各時代ごとに違った側面を持ったことを示す。さらに公域の性質は大都市と小都市、商業都市と製造業都市というように、場所ごとにも異なった。また、公共のニーズに応えるためにはいくつもの方法が可能であったが、重要なことはそれらを公域で実現することであり、その方法は問題でなかった。公域でなされるべき活動がどのように分配されようと、すなわち政治、社会そして文化的の3つのどの領域で扱われようと問題ではなく、その分配は各コミュニティに任せられていた。コーポレーションが強い指導力を握って社会を統治するか、コーポレーションの代わりにボランティア・アソシエーションが行政機能を引き受けるかは、都市の選択次第であった。つまり、どの都市にも人々からの要求を適切な方法で扱う独自の公域があったと言える。次にこのような公域で活動する都市エリートに目をむけることにする。

### 3. 各領域（政治・社会・文化的領域）におけるリーダー

都市エリートは公域のリーダーとして存在し、公域を通してのみ認識されたという点で、公域と深い関係を持つ。都市エリートは、公域で、とりわけ統治と社交面を主導する人々と規定されるが、本節では、まず前節で検討した公域の3領域におけるリーダーをそれぞれ見ていく。

公域の各側面でリーダーがみられるが、それらが都市エリートを構成する。政治的リーダーは都市の様々な政治的組織に関与する者であり、そこでの重要な地位を獲得することが政治的リーダーたる条件である。政治的機関の設立は法で認められ、その存在は必ず公式に記録されているため、政治的リーダーの特定はさほど難しくない。さらに都市政府のポスト、中でも重要なポジションはその数も限定されていて、政治的リーダーと見なされる者は比較的少数でしかない。

キングス・リンでは通称ホールと言われるコーポレーションのカウンシルの構成員が政治的領域の中心に位置する。ここには、名望家層に加え、ビジネスでの成功により財産を築いた裕福な人々

も含まれ、ある水準を満たす者に対して比較的開放的であった。町の性格上、多くが商人であったが、その他にも、専門職、特に弁護士も少なくはなかった。またホール・メンバーのほとんどがコーポレーション以外の主要な政治的機関に従事していたため、教区委員会や貧民救済委員会に聖職者が加わる等の小さな違いはあったものの、各組織の構成員はかなり似通っていた。

しかしキングス・リンの法定特別委員会が、その他の政治的機関での活動が見られなかった者をメンバーとして含んでいたことに触れておくべきであろう。<sup>22)</sup> ウェブ夫妻 (S. & B. Webb) らが主張するように、一般に法定特別委員会ではコーポレーション等で勢力を揮う既存勢力に対立する新興勢力がその委員に任命されることが多かったと言われる。<sup>23)</sup> そのためコーポレーションと法定特別委員会が対立した政策を出す例も少なくない。例えばリヴァプールでは、ドックの建築をめぐる、既存の商人を中心とする有力者で構成されるコーポレーションと新しく力をつけてきた商人を中心とするドック委員会が正面から衝突をしていた。<sup>24)</sup> しかし、キングス・リンでは新興勢力と既存勢力の対立の解決策として法定特別委員会が利用されたという形跡はない。1700年以来、この町には救貧委員会や港湾関係の委員会、そして道路舗装委員会といくつかの委員会が地方法で認められてきたが、どの委員会も少なくとも半数はホール・メンバーとの兼任者であった。<sup>25)</sup> ホール・メンバーでない者の法定特別委員への任命は、既存勢力に対抗する新興勢力の拡大と見るよりも、むしろ舗装委員会が従事する仕事の性質上、より多くの委員を必要とされ、政治的リーダーの拡大が見られたと解釈するのが自然である。事実、ホール・メンバーでない道路舗装委員が、それ以外の政治的領域で活動していなかったわけではなく、教区役員 (head-borough) や救貧委員 (overseer) のようなポストについていた者も多かった。<sup>26)</sup>

キングス・リンの政治的リーダーの人数は、19世紀初期には、ほぼ60人位と推察できる。内訳は、まずホール・メンバーは市長と12人のオルダマンと18人のコモン・カウンシラーの計31人である。また、ホール・メンバーでない者が最も多く構成員となった道路舗装委員会の場合、1803年から1810年にのべ41人の委員の指名が見られるが、そのうち20人はホール・メンバーである。<sup>27)</sup> その他、政治的リーダーには、とりわけ救貧関係の委員会で聖職者が任命される場合があるため、この領域全体では60人という人数は妥当であろう。

社会的リーダーはボランタリー・アソシエーションのリーダーと言えるが、その構成員を特定することは簡単なことではない。まず、ボランタリー・アソシエーションの数はかなり多く、政治的

22) KL/PC 1; KL/PC 2/1-4。

23) Webb [1908], Vol.4; Langford [1991]。

24) Longmore [1989]; Power [1999]。

25) Barney は新しい委員会ほど全委員に占めるホール・メンバーの割合が徐々に低下していく点を指摘し、ホール・メンバーの影響力の低下を主張している。Barney [1997]を参照。しかし少なくとも委員の中で大きく意見が食い違い計画が座礁したという記録はなく、既存勢力と新勢力の対立は見られない。

26) KL/C 7/13-16。

27) KL/C 7/15, KL/PC 1, KL/PC 2/1-2。

リーダーと比較して、社会的領域で活躍する人々の数は圧倒的に多かった。また、その種類も多岐にわたり、1つのヒエラルキーの中で機能したわけではなかった。そのため、数多くのボランティア・アソシエーションで中心的役割を持つ者を社会的リーダーとみなすのが適当である。

表2が示すように、キングス・リンのボランティア・アソシエーションは多岐にわたっていたが、このことはキングス・リンの社会的リーダーが非常に広範で、あらゆる種類のボランティア・アソシエーションに役員または会員として関与する者であったことを示す。各アソシエーションの会員数の記録はほとんど残されていないが、数十人から100人を超すものまで、その規模は様々であった。最大のアソシエーションの1つで1804年に形成された「リン慈善ソサエティー (*Lynn Benevolent Society*)」は、1820年以降に急成長して、1830年には1000人を超える会員数を持つ大所帯にまで成長した。<sup>28)</sup>「リン診療所 (*Lynn Dispensary*)」も1835年には1280人の会員が記録されている。<sup>29)</sup>しかし、そのような大きなアソシエーションでさえ、中で主導的役割を持っていたとみなせる人々は委員に任命されていた一握りで20人位と考えられる。またいくつものアソシエーションにまたがってリーダー的役割を果たすものも多かった。従って、社会的領域全域を見たとき、社会的リーダーの人数が100人を超えていたとは思えない。また、社会的リーダーの職業構成を見てみると、政治的リーダーと比較して、専門職、特に聖職者と医療関係者の数の多さが特徴的であった。

基本的に女性の参加は認められていなかった政治的領域とは異なり、性別を問わず比較的自由的な参加が可能であった社会的領域では、女性は、とりわけ慈善活動や学校、宗教団体等に、寄付を通してしばしばかかわりあっていた。しかし各組織の中で主導権を持ち、意志決定をしていたのはほとんどが男性であり、女性の活動はトップの決定をより広く普及するような実務に限られる場合が普通であった。事実、キングス・リンでもその傾向は強く、非国教徒の宗教的グループによる普及活動や「スープ・ソサエティー (*Soup Society*)」の実働は主に女性によって遂行されていたが、中枢部は男性であった。そのような環境の中、女性主導で組織されたいくつかの珍しい団体がキングス・リンでは見られた。1826年に組織された「貧困者の訪問を目的とするソサエティー (*The Society for Visiting and Relieving the Sick, Poor at their own Houses*)」は通称「女性による訪問ソサエティー (*Ladies' Visiting Society*)」と呼ばれ、数人の例外的幹部を除いて、オーガナイザーは全て女性で、女性により運営されていた。<sup>30)</sup>また、「子供用寝具供給ソサエティー (*Child Bed Linen Society*)」は女性の発案で組織され、その運営の一部に女性がかかわっていた。このように、社会的機関で女性が指導的立

28) 1820年以降にリン慈善ソサエティーへの新規寄付者が急増し、1833年には1200人、1834年には1300人からの献金で350人ほどの貧困者が施しを受けたことを *Norwich Mercury* (以後 NM と表記) は伝えている。NM 31/12/1831, 18/1/1833, 8/3/1834。

29) NM 25/4/1835。

30) 会計役 (treasurer) に Edmund Elsdon と Francis Cresswell, 監査人 (auditor) に John Prescott Blencowe と Rev. Edward Edwards が「ソサエティーの公的な特性 (official characters) を示すため」に特別に手を貸していた。KL/TC 2/2/1, NM 23/12/1826。

場にいる場合も観察されたが、女性の社会的リーダーがいるかどうかについては疑問が残る。まず、例えば「訪問ソサエティー」の委員は、社会的領域の他の組織や政治的領域でイニシアティブをとっていた男性の「妻」である場合がほとんどで、独立した個人として力をふるっていたとはいきれない<sup>31)</sup>。また、仮に彼女達が「訪問ソサエティー」や「子供用寝具供給ソサエティー」のリーダーであったとしても、社会的リーダーと呼ばれるためにはさらに多くの機関にリーダーとして従事している必要がある。故に、女性の社会的リーダーの存在についてははっきりと肯定することは難しい。

文化的領域の目的は、人々の楽しみや啓蒙のための文化・娯楽イベントを普及させることにある。その目的のためにはプロの役者や音楽家、芸術家をはじめ、劇場の支配人等のプロモーターなど、イベントの「生産」活動にたずさわる人々も重要ではあるが、それ以上にここで強調したい側面は「消費」活動にある。ここでは文化的リーダーを文化的イベントに頻繁に参加することによってそれらの消費に貢献する人と定義する。たとえば1750年ごろ、ロンドンからキングス・リンに連れてこられ約十年滞在した著名なオルガン奏者、チャールス・バーニー (Charles Burney) は、演奏活動を通してこの町での音楽の普及に大きな貢献をした。しかし、ここでいう文化的リーダーはむしろバーニーではなく、彼の催すコンサートに頻繁に通ったり、彼の音楽活動を経済的に支えたパトロン達であった。

文化的領域は、人々の参加数に対してもっとも制約がなく、イベントを消費する財政的余裕があるもの全てに開かれていた。また、政治・社会的領域と異なり女性の参加も抑制されていないだけでなく、むしろ積極的に参加を要求されていた<sup>32)</sup>。故に、この領域では多くの女性が主導的役割を果たし、すなわち女性の文化的リーダーが存在したといえる。しかし、文化的リーダーは間違いなく存在したものの、このような開放的な性格は文化的リーダーの特定を非常に難しくさせたことは疑いない。

多くの文化・娯楽イベントがキングス・リンで見られたことは前述したが、文化的リーダーはそのようなイベントに頻繁に顔を出すだけでなく、その服装やマナーにも細心の注意を払い、ある意味で最も華やかで都市ルネサンス期独特の存在であったとも言える。これらのイベントに人々はお互いが競合するかのごとく華やかに着飾り、その社会的ステータスは人々の目によくとまった。都市のジェントルマンのみならず、カントリー・ジェントリもリンの文化的リーダーの一部を構成していた。たとえばある地方紙は、1812年10月に行われた恒例の新市長就任パーティーには、キングス・リンとその近隣に住む約150人のジェントルマンが参加したが、そこにはオーフォード伯爵

31) 委員長には市長夫人が毎年必ず選出されることが規約に書かれている。KL/TC 2/2/1。また委員全員の名前はわからないが、例えば Richard Bagge の妻、Pleasance も委員であったことが彼女の日記に記されている。BL V1a (XII)。

32) Vickery [1998], pp. 9-10。

(Earl of Orford) やノーフォーク州選出の国会議員、ウィリアム・コック (William Coke)<sup>33)</sup>、キングス・リン選出の2人の国会議員も含まれたと伝えている。<sup>34)</sup>

以上のように政治的、社会的そして文化的リーダーについて述べてきたが、これらのリーダーに共通して必要とされたものは公域での活動資金を賄えるだけの財産の所持であり、これは18世紀の公域に参加するための事実上の前提条件とも考えられる。政治的リーダーは基本的に無報酬であっただけでなく、ポケットマネーを持ち出して公的職務に従事することは普通のことであった。キングス・リンの市長は18世紀半ばには100ポンド、19世紀には200ポンドの俸給をもらったが、年に数回ある公式パーティーの費用はすべて自分で賄わなければならなかったことを考えるとその金額は十分なものにはほど遠い。たとえばウィリアム・バグ (William Bagge) は1819年と1829年度の市長であったが、その就任パーティーには両年ともに400ポンドを投資したと言われる。<sup>35)</sup> 財政的負担から公職を辞退する者が18世紀になると各地で頻繁に見られたことは多くの研究者によって指摘されているが、明らかに、公職に就くことによる財政的負担は、決して少なくない罰金をはるかに上回るものであった。<sup>36)</sup>

ボランティア・アソシエーションは政治的機関のように地方税 (rate) やレント (rent) を課すことができず、寄付金や会費のみにその収入を依存していたため、参加者の資産なくしてはどんな活動もなすことができなかつた。多くのボランティア・アソシエーションに関わっていた社会的リーダーは、そこでの指導的役割はもちろんのこと、活動資金やそこでのコストの負担も背負っていたため、それらを負担するのに見合うだけの財産を持たなければならなかつた。アソシエーションの会費は年間数ポンドが一般的であったが、大きなプロジェクトの場合、一度に100ポンドを越す寄付が要求された。たとえば1812年に新劇場が建築された際は、37人の個人寄付者のうち32人が100-300ポンドを負担していた。<sup>37)</sup>

文化・娯楽イベントには出費が必ず伴う。文化的領域でも、財産を持つことは都市文化を消費する文化的リーダーにとって必要条件であった。キングス・リンでは18世紀を通してイベントへの参加費は大体決まっていた。例えばパーティーの参加費は5シリング前後、演劇は座席の位置によって異なるが1シリングから4シリング、コンサートは3シリング、展示会は半シリング以下であった。<sup>38)</sup> それに加え、このような公共の場にでかけるためには服装や装飾品、馬車等にも気を使わなければならなかつた。このように参加費そのものはさほど大きくなかつたが、それぞれのステータス

33) ノーフォークの農業のプロモーターとして有名である Holkham に住む W. Coke は、同時にキングス・リンとも政治的利益で強く結びついていた。Stirling [1912]。

34) *Norwich, Yarmouth and Lynn Courier*, 3/10/1818。

35) Richards [1990], p. 121。

36) 市長職の拒否に対する罰金として、キングス・リンでは18世紀には40-60ポンドを科していた。KL/C 39。

37) KL/C 8/40。

38) 各イベントの料金情報は地方新聞に掲載されている広告を参考にした。

に見合ったマナーを心がけるためにはかなりの出費が必要とされた。

故に財産の所持は公域で活動する都市エリートにとって不可欠であり、経済的領域が公域と深いつながりを持つことは以上の例からも明らかであるが、政治的、社会的そして文化的領域と並んで経済的領域を公域の一部と考えることができるかどうかについてはまだ議論が残る。繰り返すが、ここでは経済的領域を公域の一側面とみなすよりも、むしろ公域参加のための前提条件としての機能に着目した扱いをする。

#### 4. 「都市エリート」とその条件

前節では公域の領域各々におけるリーダーを検討してきた。本節では「都市エリート」とは何であったのか、どんな条件が課されていたのかを考察する。しかし、その問いに答える前に、まず、本稿でいう都市エリートが都市在住者に限らず、都市の公域に参加するもの全てに開かれていたことを確認したい。つまりいわゆるカントリー・ジェントリも都市の公域に何かの形でかかわっていれば都市エリートの構成員になり得た。都市エリートとは都市を見る時の概念であり、居住地にかかわらず、都市に<sup>39)</sup>関与する者に適用される。

次に、これまで述べてきた各領域のリーダーと「都市エリート」は同義語であるかという問いが持ちあがる。18世紀よりも前の時代のキングス・リンのエリートは公域のほとんど全ての事柄に通じていて、比較的一元的であり、各エリートがほぼ似た機能を持っていた。しかし、この時期の公域は18世紀と比べてかなり狭く、政治的領域に限定されていたと言ってよい。一方、18世紀になると社会拡大や分化の結果、バラエティーに富んだエリートが現れてきた。たとえば、クェーカー教徒のダニエル・ガーニー (Daniel Gurney) は銀行業務を通して巨大な財産を築いたが、キングス・リンでは地方政府のポストに一切つかなかった。<sup>40)</sup>これは彼がクェーカーであったため政治的領域から排除されたわけではない。この町は非国教徒に対して非常に寛大で、クェーカー教徒の市長さえ<sup>41)</sup>選出された。ガーニーは地方政府にかかわらないかわりに、ボランティア・アソシエーションを通しての慈善事業に積極的であった。結果として、彼はキングス・リンの住人の中では慈善家として、そして社会的リーダーとして、リンのエリートの中でも突出した人として良く知られるように

39) 逆に都市に本拠を置く商人等の「都市エリート」が郊外に土地を保有しその交友関係をカントリー界に拡大していった場合、彼らは「都市エリート」であると同時に「カントリー・エリート」にもなりうるが、これは「カントリー・エリート」がカントリー社会を見る時の概念であるからである。「都市エリート」と「カントリー・エリート」の混同は社会を理解する上で混乱を招くので、その扱いには注意が必要である。

40) Thew [1891], p.145. また、Daniel Gurney はキングス・リンでは地方政府の役職にはついていなかったが、ノーフォーク州のハイシェリフ (High Sheriff) には就いていた。

41) クウェーカー教徒の Joseph Taylor は1800年にキングス・リンの市長に選ばれた。

42)  
なった。

このように、都市エリートの活動は1つの側面に限られることはなく複数の側面で活躍するものでもあったが、あらゆる公的側面にかかわることは18世紀になると現実的には不可能で、公域の何かに特化した活動を行ったようである。結局、どの分野にせよ、公域に主導的立場に関わるものが18世紀における都市エリートだと言える。

都市エリートであるためには、既に述べたように、まず公域に参加するために必要とされる資産条件を満たすことが前提条件で、さらにそれを元手に公域で民衆のニーズを実現するために主導的な役割を果たすことが必要であった。たとえば一部の行政業務を除いて、もちろんほとんど全ての分野で寄付が必要とされたことは間違いないが、それに加え、エリートには「主導的」機能を果たす必要性があった。つまり、ただ活動資金を提供して実際の政治・社会的領域でのプロジェクトに責任を持たない者はエリートとはみなされなかった。

さらに実際の社会での活動だけでは都市エリートと呼ぶにはまだ不十分であった。エリートとしての社会的認知のためには、人々からの認識が必要とされた。まず、エリートとしての活動が都市の住民によって認識されなければならなかったが、このためには公域での自己顕示 (public display) が重要になってくる。公的な儀式はエリートと一般民衆との差を示すのに良い機会であり、また文化的領域は様々な社会的地位をもつ人々が集まっていたので、都市民からエリートとして認められるには便利な場であったし、また衛示的消費もこの目的のためには有効であった。これらを要求されたのは都市エリートだけでなく、カンントリー・エリートが都市社会の中にその影響力を少しでも見せつけようとした場合、彼らもまたそれに見合った公的空間での「見せびらかし」を必要とされた。なぜなら都市エリートは都市社会に参加するものが結集したものと考えられ、カンントリー・エリートも、たとえば都市の文化的生活への参入という形を通して、都市エリートの一部分を構成していたからである。一方、社会的認識はエリート間でも必要なものであった。公域でのソーシャビリティに加え、エリートが自分達の家で個人的に催すお茶会やディナー、パーティーのために訪問しあうことは、明らかにエリート間で認識しあうのに役にたった。また、エリート達は似たような嗜好を持つべきとされていたが、このことは消費の重要性を高める結果になった。<sup>43)</sup> こうしてエリートはお互いに空間を共有し、類似の嗜好を持つことにより仲間意識を強めていった。ここでキングス・リンの最も有力な一族の1つとしてバググ (Bagge) 家の活動を見てみる。

バググ家は17世紀末にキングス・リンに移り住み、その後、醸造業と商業行為で地道に成功を収めていった。そして18世紀後半には、当時の最有力者フィリップ・ケース (Philip Case) の娘との結婚により一躍、町のエリートの中でも第一線に踊り出て、その地位を不動のものとした。この一

42) Thew [1891], p. 144-6.

43) Borsay [1989]; McKendrick, Brewer & Plumb [1993]参照のこと。

族出身の多くが公域、すなわち政治、社会そして文化的領域で主要な役目を担った。1750年以来、のべ11人の市長を送りだし、公式行事に参加するたびに行列や演説を通してその存在をアピールした。彼らの行う集いやディナーのすばらしさは、名望家の名前が連なる出席者リストと共に、事細かに地方新聞に報道されたが、これらは一般市民にバッグ家がエリート一族であることを認識させる上で大きな役割を果たした。また一族の名は道路舗装委員会発行の証券引き受け人、<sup>44)</sup> またはいくつかのボランタリー・アソシエーションの会員リストに載せられ、町中に配布された。<sup>45)</sup> バッグ家の名は公式会合のみならず、会費性の集いの世話役としても新聞の広告を通して広められた。<sup>46)</sup> 彼らの財産目録は衛示的消費を行っていたことを示す証拠となるが、それらには家具、インテリア装飾品、銀製の食器、陶器、リネン、本、絵、絵の複製、服や時計、宝石等身の回りの装飾品などが豊富に記載されている。<sup>47)</sup> また、1831年には貧しい者達を呼び集めてストラッドセット・ホール (Stradsett Hall) というバッグ家のカントリー・ハウスで大々的なパーティーをしたが、招待者は100人を優に超えていたと報告されている。<sup>48)</sup> バッグ家の娘の婚約発表も兼ねていたこのパーティーは、一族の影響力を効果的に社会に示すのに良い機会であった。またエリート間で認められるための活動も怠っていなかった。リチャード・バッグ (1810-) の妻、プリーザンス (Pleasance Bagge) の日記にはこの夫婦のソーシャビリティにも触れている。<sup>49)</sup> 多くの人々がリチャード夫妻を訪ね、お茶やディナー、パーティーを楽しんだ。一方で、彼らは会合やディナー、演劇、音楽会、犬のレースなどにも顔を出していた。以上の例からも、バッグ家がエリートたる条件を満たすべく行為を行っていたことがわかる。

## 5. キングス・リンのエリート

本節では19世紀前半のキングス・リンのエリートを、公域の政治・社会・文化的な3つの領域へのかかわり方により、いくつかのグループに分けて考える。第1のグループには、ホール・メン

44) 道路舗装委員会発行の証券は1口が100ポンドであった。1802-9年の間に Bagge 家全体で17口、計1,700ポンド分の証券を引き受けていたが、一族の引き受け額が最大であった Everard 家の1,800ポンドに次ぐ額であった。個人で見た場合の大投資家は以下のものであった: George Hogg, 900ポンド; Harvey Goodwin, 900ポンド; Thomas Bagge, 800ポンド; Thomas Philip Bagge, 800ポンド; Edward Everard, 800ポンド。KL/PC 4/1-2。

45) 新しい劇場建築用の寄付金リストは KL/C 8/41; W. Taylor の本の出版用の寄付金リストは Taylor [1844], v-vi。

46) 以下の新聞を参照のこと: *Norwich Mercury*; *Norfolk Chronicle*; *Norwich, Yarmouth, and Lynn Courier*; *Lynn and Wisbech Packet*。例えば Thomas Bagge は1800年の第2回集会 (subscription assembly) の世話役であった。 *Lynn and Wisbech Packet*, 21/10/1800。

47) Bradfer-Lawrence Collection (BL) に Bagge 家の遺言状や遺産目録は収められている。BL Xa/5; BL X (18) part 1; BL Xd 13; BL VIIId; BL Xc 23。

48) NM 25/6/1831。

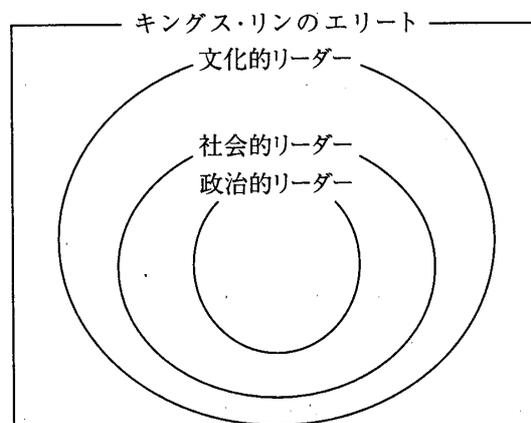
49) BL VIa (XII)。

バーとして政治的領域に参加した者が挙げられる。いわゆる名望家一族とこれらと婚姻によって非常に深いつながりをもつ古くからの名門一族が筆頭例である。それに加え新興の個人も見られたが、同じ政治的リーダーでもこれらは名望家とは分けて考えられる傾向があった。一部の例外を除いてほとんどがその本人一代のみで政治的領域から退く者が多かった。第2グループには、ホール以外の政治機関、とりわけ道路舗装委員としてのみ政治的領域に関わるものが分類される。両グループともに、政治的領域に関係するエリートは、力の入れ方に違いはあるものの、基本的に政治・社会・文化のどの領域でもこの町の指導的立場にいた。

政治的領域では表立った活躍をせず、社会的領域で影響力をふるったものが次のグループである。ここに分類される人々は1835年の都市改革法施行後に政治的領域に進出するかどうかで、さらに2つに分けられる。つまり、コーポレーションの変革後にホール・メンバーに指名され政治的領域に参入した第3グループと、生涯を通して政治的領域とは無縁だった第4グループである。社会的領域を主な活動の場とするこれらのエリートは、18世紀末から19世紀初期にかけての社会変動の中で出現したこの時期の特徴的存在であり、文化的領域でもその活発な活動が観察された。とりわけ1835年以降、政治的リーダーに仲間入りした前者は、当時の社会の中で鍵を握っていたものと思われる。最後に、文化的領域のみでリーダーシップをとる者を第5グループとする。都市に住む比較的多数の「ジェントルマン」と、都市とつながりを持つカントリー・ジェントリ、そして女性がこのグループに分類された。

以上、19世紀前半のキングス・リンのエリートは5つのグループに分類されたが、どのグループの人々もすべて都市エリートとみなすことができる。つまりキングス・リンのエリートにはいくつものタイプがいて、それらが「都市エリート」を集合的に形成していた。また3つの活動領域をもとにしてキングス・リンのエリートのつながりを簡単に示すと図1のようになる。各領域がほぼ同心円状に重なりながら、社会全体の枠組の中で「都市エリート」として機能していたことがわか

図1 19世紀前半のキングス・リンのエリート



る。すなわち一般的に、政治的リーダーは社会・文化的領域でも、また政治的リーダーではないが社会的リーダーとみなされる人々は文化的領域でも主導的地位にいた。しかし、このモデルは、政治的領域にかかわる者のステータスが他に比べて高いことや、また、それらが他の領域でしか活動していないエリートを統治していたことは意味しない。繰り返すが、政治的、社会的そして文化的領域は1つのヒエラルキーの中でとらえられるものではなく、違った次元で考えられるべきものであったからである。

付加的ではあるが、都市エリートを時系列的に見た場合の性質の変化についても、さらなる考察を要する。ここで例として出したのは19世紀前半のエリートであるが、18世紀や都市改革法施行以降のエリートは、各領域の同心円的な重なり方には違いがないものの19世紀前半とは異なる性質を持ち合わせる。例えば、1835年にコーポレーションの規制が緩和され、その結果、ホール・メンバーには上記の第3グループの一部が流入してきたが、このことが政治的領域に関与する集団の性質を変化させたことは疑いがない。また公域が19世紀前半ほど分化されていなかった18世紀にも、政治・社会・文化どの領域でも主導的役割を担う者はいたが、彼らは上記の第1、第2グループのように各領域の比較的特定した部分で活躍するわけではなく、もっと公域全般の事柄に偏りなく関与したように思われる。少なくとも18世紀半ば過ぎまでの法定特別委員会では、その役員の大半がホール・メンバーと重なっていたし、委員会が請け負っていた仕事もコーポレーションの機能から大きく離れるようなものではなく、第1と第2グループをあえて分けて考える必要はない。さらに、社会・文化的領域の持つ重要性は時代が進むにつれ急増し、政治的領域以外で活躍する人々の役割を大きくすることにつながったが、すなわち、そのことは同じように第3—5グループに分類される人々でも18世紀社会と19世紀社会における重要性は異なることを意味する。都市エリートのさらに詳しい時系列的分析はまた別の機会に譲りたい。

## 6. 結論

18世紀の地方都市社会の理解にとって、公域や都市エリートに焦点をあてることは適切と思われる。本稿では都市エリートを公域と関連付けて検討するという新しい試みを提示し、キングス・リンを例にとり考察してきた。公域の機能の分化・拡大に付随して都市エリートの多様化・拡大が長期の18世紀を通して起こったが、とりわけ政治・社会・文化的3視点からの検討はその時期の公域や都市エリートを理解する上で重要である。キングス・リンの例でも示されたように、結局この時期、複数のエリートが政治、社会、文化的領域に代表される公域の至る部分で重複・補完する活動をしながら、集合的に都市エリートを形成していたといえる。

都市エリートは本稿で議論したような都市内での役割の他、カントリー社会との関係においても

重要であった。新しい都市社会と伝統的社会は徐々に調和していったが、この動きには都市エリートとカンントリー・エリートの構成員の重なり合いなども含めて、それらの関係が大きな鍵を握っているように思われる。また、都市エリートの時系列的分析は本稿では簡単にしか触れられなかったが、アイデンティティやパワーの問題とあわせて重要な問題を提起するとともに、当時の社会を理解する上で不可欠である。これらがさらなる課題として残されることを指摘して、本稿を結びたい。

#### 参考文献A (キングス・リン関係)

##### 1. 一次史料

###### King's Lynn Borough Archive

Hall Books 1731-1847 (KL/C 7/13-16)

Theatre Committee's Minute 1813-40 (KL/C 8/41)

Quarter Session Book 1768-88 (KL/C 20/3)

Guildhall Court Book 1764-1842 (KL/C 25/44)

Chamberlain's Account Books 1730-1828, 1829-35 (KL/C 39/110-209, KL/C 40/1-7)

General Committee minutes 1793-1835 (KL/TC 2/1/1-2)

Public Meetings and Voluntary Committee Minutes 1802-60 (KL/TC 2/2/1)

Paving Committee Minutes 1790-1803, 1806 (KL/PC 1)

Paving Commissioners' Minutes 1803-30 (KL/PC 2/1-4)

###### Norfolk Record Office

Bradfer-Lawrence Collection (BL)

Epitome of the Will and Codicils of Thomas Philip Bagge (1812-26), Grace Bagge (1833), William Bagge (1834), and Edward Bagge (1844) BL Xa/5

Copy of the Will of William Bagge (1801), and Jane Hulton (1868) BL X(18) part 1

Inventory of William Bagge (1835) BL Xd 13

Inventory of Stradsett : Diamond and Jewel (1834) BL VIIId

Inventory of Islington and of Lynn House : Edward Bagge (1845) BL Xc 23

Pleasance Bagge's Diary 1837-39 BL VIa (XII)

Hamond Paper (HMN)

Folkes Paper (MC)

Rolfe Paper (GUN)

Churchwardens' Account and Vestry Record 1752-1817 (PD 39/76-78)

##### その他

Bagge Family's Private Collection

##### 2. 刊行一次史料

*A Report of the Municipal Corporation of King's Lynn* (1834)

*First Report of the Commissioners Examining Municipal Corporations, Part IV Eastern and North-Western Circuits*  
(1835)

- Poll Books : MPs for Lynn* (1768, 1824, 1826, 1835)  
*White's Directory* (1837 & 1845)  
*A Calendar of Freemen of Lynn 1292-1836* (Norwich, 1913)

## 新聞

- Norwich Mercury*  
*Norfolk Chronicle*  
*Norwich, Yarmouth, and Lynn Courier*  
*Lynn and Wisbech Packet*

- Burney, C., *Memoirs of Dr. Charles Burney 1726-1769*, Klima, S., Bowers, G. and Grant, K. (eds.), (London, 1988)  
 Burney, C., *The Letters of Dr Charles Burney, volume I, 1751-1784*, Riveiro, A. (ed.) (Oxford, 1991)  
 Burney, F., *The Early Diary of Frances Burney 1768-1778*, Ellis, A. R. (ed.), (London, 1913)  
 Defoe, D., *A Tour through the Whole Island of Great Britain*, Furbank, P. N. and Owens, W. R. (eds.) (New Haven, 1991)  
 La Rochefoucauld, F., *A Frenchman in England 1784*, Marchand, J. (ed.) (Cambridge, 1933)  
 Wale, T., *My Grandfather's Pocket-Book from a. d. 1701 to 1796*, Wale, H. J. (ed.) (London, 1883)  
 Walpole, H., *Horace Walpole's Correspondence*, Lewis, W. S. and Bennett, C. (eds.) (London, 1952)

## 3. 二次文献

## 単行書

- Berry, V., *The Chronicle of a Norfolk Family 1559-1908* (Suffolk, 1979)  
 Burley, T. L. G., *Playhouses and Players of East Anglia* (Suffolk, 1928)  
 Fawcett, T., *Music in Eighteenth-Century Norwich and Norfolk* (Norwich, 1979)  
 Hillen, H., *History of the Borough of King's Lynn* (Norwich, 1907)  
 Ketton-Cremer, R. W., *A Norfolk Gallery* (London, 1948)  
 Ketton-Cremer, R. W., *Norfolk Assembly* (London, 1957)  
 Mackerell, B., *The History and Antiquities of King's Lynn* (Norwich, 1738)  
 Parker, V., *The Making of King's Lynn : Secular Buildings from the Eleventh to the Seventeenth Century* (Chichester, 1971)  
 Richards, P., *King's Lynn* (Chichester, 1990)  
 Richards, W., *The History of King's Lynn* (King's Lynn, 1812)  
 Rye, W., *Norfolk Families* (Norwich, 1913)  
 Scholes, P. A., *The Great Dr. Burney*, vol.1 (London, 1948)  
 Stirling, A. M. W., *Coke of Norfolk and His Friends* (NY, 1912)  
 Taylor, W., *The Antiquities of King's Lynn* (King's Lynn, 1844)  
 Thew, J. D., *Personal Recollections* (King's Lynn, 1891)

## 論文

- Bradfer-Lawrence, H. L., 'The Merchants of Lynn', Ingleby, C. (ed.) *A Supplement to Blomfield's Norfolk* (Norwich, 1929), pp. 145-203.  
 Fawcett, T., 'Eighteenth-Century Norfolk Booksellers : a Survey and Register', in *Transactions of the Cambridge Bibliographical Society*, Vol. VI, (1972-76), pp. 1-18.

Fawcett, T., 'Provincial Dancing Masters', *Norfolk Archaeology* 25 (1972), pp. 135-41.

Wood, F. J., 'Fuelling the Local Economy: the Fenland Coal Trade, 1760-1850', in Bruland, K., and O'Brien, P. (eds.), *From Family Firms to Corporate Capitalism: Essays in Business and Industrial History in Honour of Peter Mathias* (Oxford, 1998), pp. 199-215.

#### 学位論文

Barney, J. M., 'The Merchant and Maritime Trade of King's Lynn in the Eighteenth Century' (Uni. of East Anglia, 1997)

Cooper, S. M., 'Family, Household and Occupation in Pre-Industrial England: Social Structure in King's Lynn, 1689-1702' (Indiana Uni., 1985)

Hayes, B. D., 'Politics in Norfolk 1750-1832' (Uni. of Cambridge, 1957)

Metter, G. A., 'The Rulers and Merchants of King's Lynn in the Early Seventeenth Century' (Uni. of East Anglia, 1982)

Muldrew, C., 'Credit, Market Relations, and Debt Litigation in Late Seventeenth Century England, with Special Reference to King's Lynn, 1689-1702', (Uni. of Cambridge, 1990)

Wood, F. J., 'Inland Transport and Distribution in the Hinterland of King's Lynn, 1760-1840' (Uni. of Cambridge, 1992)

#### 参考文献B (「公域」と都市エリート関係)

#### 単行書

Barry, J. and Brooks, C. (eds.), *The Middling Sort of People: Culture, Society and Politics in England, 1550-1800* (London, 1994), 山本正監訳, 『イギリスのミドリング・ソート: 中流層をとおしてみた近世社会』(昭和堂, 1998)

Borsay, P., *The English Urban Renaissance: Culture and Society in the Provincial Town, 1660-1778* (Oxford, 1989)

Brewer, J. and Porter, R. (eds.), *Consumption and the World of Goods* (London, 1993)

Cain, P. J. & Hopkins, A. G., *British Imperialism: Innovation and Expansion 1688-1914* (London, 1993), 竹内幸雄・秋田茂訳, 『ジェントルマン資本主義の帝国I: 創生と膨張1688-1914』(名古屋大学出版会, 1997)

Calhoun, C. (ed.), *Habermas and the Public Sphere* (Cambridge Mass & London, 1992)

Corfield, P. J., *The Impact of English Towns, 1700-1800* (Oxford, 1982), 坂巻清・松塚俊三訳, 『イギリス都市の衝撃』(三嶺書房, 1989)

de Vries, J., *European Urbanization, 1600-1800* (London, 1984)

Earle, P., *The Making of the English Middle Class: Business, Society and Family Life in London, 1660-1730* (London, 1989)

Fraiser, D., *Urban Politics in Victorian England: The Structure of Politics in Victorian Cities* (Leicester, 1976)

Habermas, J., *The Structural Transformation of the Public Sphere: An Inquiry into a Category of Bourgeois Society*, transl. by Burger, T. (Cambridge, 1989), 細谷貞雄, 山田正行訳『公共性の構造転換: 市民社会の категорияについての探究 (第2版)』(未来社, 1994)

Hunt, M. R., *The Middling Sort: Commerce, Gender and the Family in England, 1680-1780* (Berkeley, 1995)

Jackson, G., *Hull in the Eighteenth Century: A Study in Economic and Social History* (London, 1972)

Koditschek, T., *Class Formation and Urban Industrial Society* (Cambridge, 1990)

近藤和彦, 『文明の表象 英国』(山川出版社, 1998)

Langford, P., *A Polite and Commercial People: England, 1727-83* (Oxford, 1989)

- Langford, P., *Public Life and the Propertied Englishman, 1689–1798* (Oxford, 1991)
- McKendrick, N., Brewer, J. and Plumb, J. H., *The Birth of a Consumer Society: The Commercialisation of Eighteenth-Century England* (London, 1982)
- Patten, J., *English Towns, 1500–1700* (London, 1977)
- Roger, N., *Whig and Cities: Popular Politics in the Age of Walpole and Pitt* (Oxford, 1989)
- Rubinstein, W. D., *Elites and the Wealthy in Modern British History: Essays in Social and Economic History* (Brighton, 1987)
- Rubinstein, W. D., *Capitalism Culture and Decline in Britain 1750–1990* (London, 1993), 藤井泰, 平田雅博, 村田邦夫, 千石好郎訳, 『衰退しない大英帝国—その経済・文化・教育: 1750–1990』(晃洋書房, 1997)
- 関口尚志, 梅津順一, 道重一郎 (編), 『中産層文化と近代: ダニエル・デフォーの世界から』(日本経済評論社, 1999)
- Shoemaker, R., *Gender in English Society, 1650–1850: The Emergence of Separate Sphere?* (London, 1998)
- Smail, J., *The Origins of Middle-Class Culture: Halifax, Yorkshire, 1660–1780* (Ithaca, 1994)
- Trainor, R. H., *Black Country Elites: the Exercise of Authority in an Industrialized Area, 1830–1900* (Oxford, 1993)
- Vickery, A., *The Gentleman's Daughter: Women's Lives in Georgian England* (New Haven & London, 1998)
- Wahrman, D., *Imagining the Middle Class: Political Representation of Class in Britain, c.1780–1840* (Cambridge, 1995)
- Weatherill, L., *Consumer Behaviour and Material Culture in Britain, 1660–1760* (London, 1986)
- Webb, S. & B., *English Local Government from the Revolution to the Municipal Corporation Act: vol.1: The Parish and the County; vol.2 and 3: The Manor and the Borough; vol.4: Statutory Authorities for Special Purposes* (London 1908)
- Willan, T. S., *The English Coasting Trade, 1600–1750* (Manchester, 1938)
- Wilson, R. G., *Gentlemen Merchants: The Merchant Community in Leeds, 1700–1830* (Manchester, 1971)
- Wilson, K., *The Sense of the People: Politics, Culture and Imperialism in England, 1715–85* (Cambridge, 1995)
- Wrigley, E. A. & Schofield, R. S., *The Population History of England, 1541–1871: Reconstruction* (Cambridge, 1981)

#### 論文

- Barker, H. and Chalus, E., 'Introduction', in Barker, H. and Chalus, E. (eds.), *Gender in Eighteenth-Century England: Roles, Representatives and Responsibilities* (London, 1997), pp. 1–29.
- Barry, J., 'Provincial Town Culture, 1640–1780: Urbane or Civic', in Pittock, J. H.; Wear, A. (eds.), *Interpretation and Cultural History* (London, 1991), pp. 198–234.
- Corfield, P. J., 'Class by Name and Number in Eighteenth-Century Britain', in Corfield, P. J. (ed.), *Language, History and Class* (Cambridge, 1991), pp. 101–30.
- Corfield, P. J., 'The Rivals: Landed and Other Gentlemen', in Harte, N. B., and Quinault, R. (eds.), *Land and Society in Britain, 1700–1914* (Manchester, 1996), pp. 1–33.
- Gatrell, V. A. C., 'Incorporation and the Pursuit of Liberal Hegemony in Manchester, 1790–1839', in Fraser, D. (ed.), *Municipal Reform and the Industrial City* (Leicester, 1982), pp. 15–60.
- Goodman, D., 'Public Sphere and Private Life: toward a Synthesis of Current Historiographical Approaches to the Old Regime', *History and Theory* 31(1992), pp. 1–20.
- 岩間俊彦, 「産業革命期のリーズの都市エリート, 1780–1820 —名望家支配からミドルクラス支配へ—」, 『社会経済史学』63–4 (1997), pp. 58–87.
- Klein, L. E., 'Gender and the Public/Private Distinction in the Eighteenth Century: Some Questions about Evi-

- dence and Analytic Procedure', *Eighteenth-Century Studies* 29 (1995), pp. 97-109.
- 小西恵美, 「18世紀におけるキングス・リン・コーポレーションの活動」, 『三田商学研究』39-4 (1996), pp. 27-52.
- Longmore, J., 'Liverpool Corporation as Landowners and Dock Builders, 1709-1835', in Chalklin, C. W. and Wordie, J. R., *Town and Countryside: the English Landowner in the National Economy, 1660-1860* (London, 1989), pp. 116-46.
- McInnes, A., 'The Emergence of a Leisure Town: Shrewsbury, 1660-1760', in *Past and Present* 120 (1988), pp. 53-87.
- Morris, R. J., 'Voluntary Societies and British Urban Elites, 1780-1850: an Analysis', *Historical Journal* 26 (1983), pp. 95-118.
- Morris, R. J., 'Clubs, Societies and Associations', in F. M. L. Thompson (ed.), *The Cambridge Social History of Britain 1750-1950*, vol.3 (Cambridge, 1990), pp. 395-443.
- Power, M. J., 'Politics and Progress in Liverpool 1660-1740', *Northern History* 35 (1999), pp. 119-38.
- Trainor, R., 'Urban Elite in Victorian Britain', *Urban History Year Book* (1985), pp. 1-17.
- Vickery, A., 'Golden Age to Separate Sphere? A Review of the Categories and Chronology of English Women's History', *Historical Journal* 36 (1993), pp. 383-414.
- Wilson, K., 'Urban Culture and Political Activism in Hanoverian England: the Example of Voluntary Hospitals', in Hellmuth, E. (ed.), *The Transformation of Political Culture: England and Germany in the Late Eighteenth Century* (Oxford, 1990), pp. 165-84.